

英語で読むハリー・ポッターシリーズ

ハリー・ポッターの謎はウロボロスで解ける

山田 正人

はじめに

2004年9月現在「ハリー・ポッター」の人気はとどまることを知らないようです。昨年6月21日には、第5巻*Harry Potter and the Order of the Phoenix*が発行されましたし、今年9月1日には日本語版『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』が発行されました。また、映画のほうもかなりの興行成績を上げています。しかし、日本における「ハリー・ポッター」人気は、本、映画ともに「日本語訳」に負うところが大きいです。確かに、静山社から出版されている「ハリー・ポッター」シリーズは、名訳であると思います。しかし、やはり、文学作品はそのオリジナルの言語でしか鑑賞できない「味」もあるはずで、そこで、少しでも深く本来の「味」を「鑑賞」するための一助になればと思い拙論を執筆しました。なお、拙論中の「ハリー・ポッター」シリーズに関する引用は、すべてBloomsbury社発行のものと、静山社発行のものです。

ハリーと知られざる「重要な存在」の旅立ち

「ハリー・ポッター」シリーズの第1巻は*Harry Potter and the Philosopher's Stone*(日本語版『ハリー・ポッターと賢者の石』以下第1巻)と題された作品です。この作品においてハリーは「成長の旅」を開始しました。しかし、この作品において「旅」を開始したのは、1人「ハリー・ポッター」だけではありません。さらに別の、ある重要な「存在」もまた、広大な世界へと旅立っていったのです。そして我々読者は、ハリーとこの「存在」の後を追いかけて行き、その「存在」が目的地に到達したときにはじめて、「大団円」を迎えるのだと私は確信しています。では、その重要な「存在」と「大団円」とは何なのでしょう。

このシリーズ作品における、重要な「存在」とは

ズバリ「蛇」です。しかも、興味深いことに冒頭近くでこの作品全体に登場することになる「象徴的蛇」が登場し、その後は、さまざまなものにその姿形を変え、シリーズ全体に登場してくるのです。それら具体例を次に挙げてみましょう。

まず最初に「蛇」が登場するのは第1巻第2章“The Vanishing Glass”(日本語版「消えたガラス」)であることはいままでもないでしょう。ここでハリーはブラジル産“Boa Constrictor”と話をします。さらに彼は魔法で無意識にガラスを消してしまい、この蛇を逃がしてしまいます。そして、自分には不思議な能力があるのではと疑い出すのです。そして、ハリーが「蛇語」を操る能力を有しているということは、第2巻*Harry Potter and the Chamber of Secrets*(日本語版『ハリー・ポッターと秘密の部屋』以下第2巻)への重大な伏線となっています。

ここまで述べれば、この“Boa Constrictor”がこのシリーズ全体の象徴となっていることは、ご理解いただけることでしょう。さらなる「蛇」の登場は、第2巻までないと思われる方も大勢いるかと思えます。しかし、第1巻には、まだまだ多くの蛇が隠れています。それらを探してみることにしましょう。まず1匹目は、ホグワーツの4つの寮の1つである「スリザリン寮」です。この4つの寮にはそれぞれシンボルマークがあります。それらに関しては第1巻第3章“The Letter from No One”(日本語版「知らない人からの手紙」)を思い出してほしいと思います。この章で、ハリーはホグワーツから来た手紙を目にしますが、そのときこの手紙の封印に使われていたものがこの4つのシンボルマークが入った蠟の封印であったのです。そして「スリザリン」のシンボルマークとして使用されているのが「蛇」なのです。この「スリザリン」という寮の名前は英語表記では“Slytherin”となっていますが、この綴りは動詞

“slither”に由来することは疑う余地がありません。この“slither”とは「蛇などがずるずると這う」という意味であり、英語版においては前述の *B o a Constrictor* の逃走場面ですでに登場済みです。(The great snake was uncoiling itself rapidly, slithering out on to the floor ... people throughout the reptile house screamed and started running for the exits.) [以下下線すべて山田] つまり「スリザリン」という名前の寮が登場した時点において、我々読者は筆者によって確実に「蛇」の逃走ルートをたどらされているのです。しかも「ずる賢い」を意味する“sly”という語を使用することで、この寮の名に“The Sly Snakes”という意味をも持たせているのです。2匹目を探しましょう。「スリザリン寮」を代表する生徒といえば、ハリーのライバルである“Draco Malfoy”(「ドラコ・マルフォイ」)です。彼はスネイプ教授のお気に入り、ハリーとは何かと対立します。この“Malfoy”とは、フランス語で「悪意に満ちた」という意味であり“Draco”とはラテン語で「竜」という意味です。西洋も東洋と同じように「竜」は「蛇」と同一視されるか、もしくは「蛇」に勝るものとみなされています。従ってこの「悪意に満ちた竜」は「邪悪な蛇」であるとみてまちがいありません。しかもこの「ハリー・ポッターの世界」は「蛇の姿をした竜が支配する世界である」と言っても過言ではありません。しかし、残念なことに日本語版「ハリー・ポッター」シリーズしか読めない方々には、その非常に重要な情報を読み取ることはできません。それは、静山社から出版された日本語版では、その重要な情報を握る部分が「カット」されているからです。そしてその情報を握る部分は、先ほど述べた4つの寮のシンボルマークに深く関わっているのです。

このシンボルマークは英語版の第1巻から第5巻まですべての「とびら」の部分にホグワーツの「紋章」という形で描かれており、問題の「竜」はその紋章の「巻物」(“scroll”)部分に書き込まれた「校訓」(“motto”)として現れてきます。それは“DRACO DORMIENS NUNQUAM TITILLANDUS”というラテン語で「眠れる竜を刺激する事なかれ」という日本語に翻訳できます。しかもこの「校訓」は第2巻第11章“The Duelling Club”(日本語版「決闘クラブ」)に英訳された形で以下のように登場します。

Deliberately causing mayhem in Snape’s Potions class was about as safe as poking a sleeping dragon in the eye 「スネイプの魔法薬のクラスで騒ぎをおこすなんて、それで無事と言えるなら、眠れるドラゴンの目を突っついても無事だ、というようなものだ。」

「眠れる竜」(“DRACO DORMIENS”)がだれを、また何を指すのかは、まだはっきりしたことは言えません。今後の展開を暗示するものであることは確かです。それゆえに、そのような重要な情報が日本語版では「カット」されてしまっているのは、返す返すも「残念でならない」ことです。今後は、ぜひとも日本語版「ハリー・ポッター」シリーズにも、このホグワーツの「紋章」を本の「とびら」に描き込んでほしいものです。

第1巻および第2巻に限らず、シリーズ全体には「ホグワーツ特急」が「紅の蛇」(a scarlet snake)であると描写されたり、パーティーの飾り付けが「ウミヘビ」(like a watersnake)のように動いていたり、猫が「蛇のようにすり抜け」たり(slither like a snake)とじつにさまざまな「蛇」や「竜」がうごめいていますが、紙幅の関係ですべてを紹介することができないのが残念です。

多用される“hiss”という擬態語

ハリーの特殊能力として「パーセルタング」(“parsel-tongue”「蛇語」)を挙げることができます。これは「蛇と会話する能力」のことで、シリーズではハリーと敵役の「ヴォルデモート」しか使えません。

英語では蛇の発する声は“hiss”という単語をあてて表現します。それは第1巻第2章で“B o a Constrictor”が逃走した際に残した言葉に“hissing voice”という表現が使用されていることから知ることができます。(日本語版では「シューシューという声」と翻訳。)そしてシリーズ中、蛇が登場する場面ではかなりの頻度でこの“hiss”という擬態語が使用されます。第2巻第11章“The Duelling Club”(日本語版「決闘クラブ」)同じく第17章“The Heir of Slytherin”(日本語版「スリザリンの継承者」)および第4巻 *Harry Potter and the Goblet of Fire* (日本語版『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』以下第4巻)第1章“The Riddle House”(日本語版「リ

ドルの館」), 第33章“The Death Eaters”(日本語版「死喰い人」)から文例を引用し、見てみることにしましょう。

Enraged, hissing furiously, it slithered straight towards Justin Finch Fletchley and raised itself again, fangs exposed, poised to strike.

「挑発され、怒り狂ってシューシューと、へビはジャスティン・フィンチ・フレッチリーめがけて滑り寄り、再び鎌首をもたげ、牙をむきだして攻撃の構えを取った。」

Waiting for fangs to sink through his body he heard more mad hissing, something thrashing wildly off the pillars.

「いまにも毒牙が体にズブリと突き刺さるかど覚悟したとき、ハリーの耳に狂ったようなシューシューという音と、何かのた打ち回って、柱を叩きつけている音が聞こえた。」

The snake lifted its ugly triangular head and hissed slightly as the legs of the chair snagged on its rug.

「椅子の脚がマットに引っかかり、蛇が醜悪な三角の鎌首をもたげて微かにシューツと声をあげた。」

He took not slightest notice of Wormtail, who lay twitching and bleeding on the ground, nor of the great snake, which had slithered back into sight, and was circling Harry again, hissing.

「(ヴォルデモートは:山田による追加)地面に横たわり、ピクピク痙攣しながら血を流しているワームテールのことも、いつの間にか戻ってきて、シャーツ、シャーツと音を立てながらハリーの周りを這い回っている大蛇のことも、まるで気に留めていない。」

上記のものはどれも「蛇」が発する独特な「声」として“hiss”という単語が使われています。しかし人が、この“hiss”という単語を使用している場合もあります。しかも「ハリー・ポッター」シリーズにおいては「蛇」が発するよりも、「人」が発する場面のほうがはるかに多いのです。以下にそれらの文例を

見てみましょう。

第1巻第12章“The Mirror of Erised”(日本語版「みぞの鏡」)の中の1文。

“‘I’m freezing,’ said Ron. “‘Let’s forget it and go back’. ‘No!’ Harry hissed. ‘I know it’s here somewhere.’”

「『凍えちゃうよ。もうあきらめて帰ろう』とロンがいった。『いやだ！ どっかこのあたりなんだから』ハリーはつぶった。」

第2巻第7章“Mad Blood and Murmurs”(日本語版「汚れた血と幽かな声」)の中の例。

“‘Quick, behind here’ Harry hissed, dragging Ron behind a nearby bush.

「『早く、こっちに隠れて』ハリーはそうささやいて、脇の茂みにロンを引っ張り込んだ。」

第3巻*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* (日本語版「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」)以下第3巻)

第15章“The Quidditch Final”(日本語版「クィディッチ優勝戦」)の中で、スリザリン生が食堂で使った例。

“The Slytherin table hissed loudly as they passed.”

「スリザリンのテーブルからは、選手が通り過ぎるとき、嫌みな野次が飛んだ。」

第3巻第19章“The Servant of Lord Voldemort”(日本語版「ヴォルデモート卿の召使い」)の中で、スネイプ教授がルーピン教授を捕らえ、ハリーと言いかう場面での例。

“‘Don’t ask me to fathom the way a werewolf’s mind works,’ hissed Snape.”

「『人狼がどんな考え方をするか、我輩に推し量れとでもいうのか』スネイプがすごんだ。」

第4巻第22章“The Unexpected Task”(日本語版「予期せぬ課題」)の中でハーマイオニーが使用した例。

“‘That egg!’ Hermione hissed.”

「『あの卵よ！』ハーマイオニーが歯を食いしばりな

がら言った。」

第4巻第27章でスネイプ教授が使った例。

“You were out of bed on the night my office was broken into!” Snape hissed.

「『おまえは、我輩の研究室に侵入者があった夜、ベッドを抜け出していた』スネイプのヒソヒソ声が続いた。」

第4巻第34章“Priori Incantatem”(日本語版「直前呪文」)の中で、ヴォルデモートの杖から現れた犠牲者達が使った例。

“...and Voldemort’s dead victims whispered as they circled the duellers, whispered words of encouragement to Harry, and hissed words Harry couldn’t hear to Voldemort.

「…ヴォルデモートに殺された犠牲者達は、二人の決闘者の周りを回りながら、囁いた。ハリーには激励の言葉を囁き、ハリーのところまでは届かない低い声で、ヴォルデモートを罵っていた。」

いかがでしょうか。すべて同じ“hiss”という単語を使った場面ですが、日本語版ではそれぞれの状況に合わせて、訳が変えてあります。そこで、今、手元にある三省堂『ウィズダム英和辞典』で“hiss”を調べてみました。すると次のような説明を見つけました。「人に強くささやくように言う。小声で怒る。しーっと言って不満・非難を表す。【しかる・ののしる・制止する】小声できつく言う」

これでおわかりだと思いますが、この“hiss”という言葉は、「嫌悪」等の感情を相手にぶつけるときに使用する単語であるのです。しかし、ここで忘れていけないのは、この“hiss”という語は、通常「蛇」が出す音として使用される頻度が一番高いということです。しかし、今みた例はすべて「パーセルタング」が話されている場面ではありません。にもかかわらず、わざわざこの「蛇」の擬態語が使用されています。これは、見方を変えれば「ハリー・ポッター」シリーズにおける登場人物達は、自分達が気づかぬうちに「蛇」(「竜」)に変身させられているのです。

では、これら人物をも自らの姿に変えてしまう「蛇」や「竜」はどこに向かい何をしようと企てているのでしょうか。

「ウロボロス」の完成

「蛇」という生き物は、洋の東西を問わず世界中で、崇拝の対象であると同時に、悪の象徴としてもとらえられてきました。それは、ギリシャ神話における「ヘルメスの杖」に現れると同時に『聖書』における「イブの誘惑」を行ったものが蛇であることを考えればおわかりになることでしょう。つまり「蛇」とは非常に神秘的な生き物として世界中の人々にとらえられてきたのです。それは、「蛇」が「脱皮」という行為をするからであり、その脱皮という行為からは「再生」「不死」「循環」などという概念が生まれてきました。そして、それら「円運動的概念」と「蛇」の姿が結びつき、「ウロボロス」(“Ouroboros”)という象徴が誕生するのです。これは「自らの尾をくわえる蛇」のことでギリシャ語で「自らの尾を食らうもの」という意味があります。この象徴は、先ほど述べた概念を表すものとして、キリスト教の一派である「グノーシス派」が使用していました。しかし、この「ウロボロス」が象徴として使用された最も注目すべきものは、やはり「錬金術」でしょう。「錬金術」とは、卑金属を貴金属に変える、もしくは不老長寿の薬を作り出すために行われた原始的な化学技術のことです。そして、この錬金術において「ウロボロス」が象徴するものはなんと「賢者の石」なのです。

この時点で我々読者は、なぜ「ハリー・ポッター」シリーズ第1巻が*Harry Potter and the Philosopher’s Stone*であるのか、そしてなぜ、この作品の冒頭部分に「蛇の旅立ち」が描かれているのかという理由を発見するに至るのです。つまり原作者は、あの「旅立った蛇の帰還」という「ウロボロスの完成」をもってして、この「大河シリーズ」の完結を企てているのです。

2004年現在において、原作者はまだハリーの両親が逃げた「非業の死の真相」を明らかにしていません。しかし、この「両親の死」こそがハリーの「探求の旅」(“quest”)の「出発地」であり、且つ「目的地」であることは明白です。そして、読者である我々もハリーと共にその「探求の旅」に出ているのです。そしてハリーは、この「探求の旅」の中で「人間の成長」を続けます。これは、過去から未来へと流れる時間の中において行われることですが、それ

と同時に彼は、両親の「死の真相」という「過去」のでき事をも、その未来の中に「探求」しようとしています。つまり、彼は「未来」に向かいながらも「過去」へ回帰するという「円運動」を行っており、我々もまた彼と共に、その運動を続けているのです。そしてこのことが、とりもなおさず「ウロボロス」の形成であることはもう、言うまでもないことでしょう。換言すれば、ハリーと読者である我々は、ハリーの両親の「死の真相」のかぎを握る「蛇」を追い求めます。そして、その蛇が「ウロボロス」となったときにはじめて、ハリーの両親の「死の真相」を突き止めるのです。さらにそのときには、第1巻でダンブルドア校長によって破壊されたことになっている「賢者の石」とハリーの両親の「再生」という「大団円」を目にすることになると予想できるのです。

おわりに

近年、これほどまでに世界中の人々を魅了した物語を私は知りません。まさに世界中の人々がハリー・ポッターの魔法に、いや原作者であるJ.K.Rowling氏の魔法にかかってしまったようです。

紛れもなく、この作品は長く世界中の人々に読み継がれることでしょう。しかし、このシリーズの深層に潜む「真のテーマ」については、はたしてどれほどの人々が気づいてくれるかは不安にならざるを得ません。そのことに関しては、少しでも多くの人々が、本当の意味での「ハリー・ポッター」シリーズの楽しみに気づいてくれることを願ってやみません。

最後に、世界中の人々にすばらしい「魔法」をかけてくれた原作者であるJ.K.Rowling氏と、このすばらしい作品を日本に紹介してくれた松岡佑子氏に対して、再度深く感謝しつつ、この拙論を閉じたいと思います。

引用文献

- J.K.Rowling 著, 松岡佑子訳 『ハリー・ポッターと賢者の石』 静山社 1999
 J.K.Rowling 著, 松岡佑子訳 『ハリー・ポッターと秘密の部屋』 静山社 2000
 J.K.Rowling 著, 松岡佑子訳 『ハリー・ポッターとアズカバンの囚人』 静山社 2001

J.K.Rowling 著, 松岡佑子訳 『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』 上・下巻 静山社 2002

J.K.Rowling “Harry Potter and the Philosopher’s Stone” Bloomsbury 1997

J.K.Rowling “Harry Potter and the Chamber of Secrets” Bloomsbury 1998

J.K.Rowling “Harry Potter and the Prisoner of Azkaban” Bloomsbury 1999

J.K.Rowling “Harry Potter and the Goblet of Fire” Bloomsbury 2000

参考文献

シュヴァリエ / ゲールブラン著 金光仁三郎他訳 『世界シンボル辞典』 大修館書店 1998

バーバラウオーカー著 『神話・伝承辞典』 大修館書店 1988

マイケルクラント ジョン・ヘイゼル著 『ギリシヤ・ローマ神話辞典』 大修館書店 1988

『ウィズダム英和辞典』 三省堂 2003

(春日丘高等学校教諭)